



## 映画雑感2

柴生田 晴四

(経済倶楽部理事長)

「ド」のごみ置き場を連想させました。暗鬱な中に差し込む一条の光。映像芸術としての映画の魅力を再認識させてくれる作品でした。不器用に生きる青年を好演した綾野剛は「白雪姫殺人事件」でも、無責任で投げやりなフリーター役を好演しています。

▼2014年も邦画を中心に映画館通いに精励しました。もっとも記憶に残っているのは「そのみにて光輝く」です。過失で同僚を死に追いやってしまった心の痛手から無気力な毎日を通す若者が、悲惨で出口のない境遇の女性と出会うことで次第に生きる意欲を取り戻していきます。モノクロームな採石場の風景は主人公の暗い心象風景を思わせませんが、どこかはるか昔に見た「灰とダイヤモンド

▼続いて観た「私の男」では、暗い画面に養女との愛におぼれていく男の出口のない生が描かれます。男を守るために平然と殺人を犯す少女は、やがて若い恋人を作って…。無表情な浅野忠信がはまり役でした。

▼時代劇も5本観ました。「超高速参勤交代」はタイトル通りテンポ感のある演出で最後まで一気に駆け抜けました。権力者の横暴に立ち向かう小藩の意地が爽快。一方、何度かテ

合う岡田准一の清々しい演技が収穫でした。「柘榴坂の仇討」では円熟味を増した中井貴一と阿部寛の見ごたえのある競演に加え、脇を固める多彩に俳優陣にも惹かれました。特に結末へ導く旧幕臣を演じた藤竜也の存在感はやはりただものではありません。

レビドラママ化されたタイムスリップものの「幕末高校生」は、落ちこぼれ教師といささか腑抜けに見える勝海舟が最後にはきつちりと江戸を救います。これまでとは違った味付けが面白かった。林家たい平主演の「もういちど」は、まさに落語の世界から抜け出してきたような江戸の長屋が舞台の人情映画。笑点のおちゃらけとはうって変わったたい平の重厚な演技に驚かされました。

▼ここしばらくアメリカ的善意のデイズニー映画とは反りが合わなかったのですが、日本語版の歌唱が素晴らしいとの批評に押されて「アナと雪の女王」を観に行きました。大ヒットとなった松たか子の劇中歌は評判通りの圧倒的な絶唱でした。しめくりの同じ歌に別の歌手が起用された意味がいま一つ理解できませんが、敵役の王子が結構リアリティのある役回りで納得でした。

▼秋には「蝸の記」「柘榴坂の仇討」が相次いで公開されました。いずれも堂々たる本格時代劇です。原作がしっかりしていて演技力のある俳優陣がそろい、久しぶりの仕事に熱く取り組むスタッフが目に浮かぶようです。

「蝸の記」では役所広司の貫録に若さで向き

ある役回りで納得でした。